

# 龍谷大学蔵『黒谷上人語燈録』(〇二二―二三四―七)における疊字について

瀬古淳祐

## 一 本稿の目的

龍谷大学蔵『黒谷上人語燈録』(〇二二―二三四―七)以下『黒谷上人語燈録』と記す)は、法然(一一三三―一二二二)の制誡や消息・法語・伝記などの遺文を、了恵(一二四三―一三三〇)が編集した書である。いわゆる和語燈録(全七冊)であり、本文は元享元年の版本である。本稿においては、『黒谷上人語燈録』(龍谷大学善本叢書 一五)と龍谷大学ホームページに掲載されている写真版を依拠テキストとしている。その本行、振り仮名において、同じ仮名や漢字が繰り返される場合には、ほとんどの場面において疊字が用いられていた。しかしその一方で、繰り返しが起こっている場合でも、疊字が用いられていない場合や、漢字の疊字「々」ではなく、「く」が用いられている場合などがみられた。

本稿の目的は、『黒谷上人語燈録』の全文における疊字の用例を調査したうえで、『黒谷上人語燈録』における疊字の用いられ方を帰納することである。加えて、帰納した際にみられた規則や傾向に

当てはまりながらも、疊字が用いられていない場合の原因も考察する。

## 二 疊字についての先行研究

『黒谷上人語燈録』における疊字についてみていく前に、疊字の特徴をおさえるために、先行研究を見る。

疊字の沿革についての研究は、中田祝夫の『改訂版 古點本の國語學的研究 総論篇』が詳細に述べている。また、小林芳規の「踊り字の沿革續貂」では、片仮名において用いられる「くく」の変遷について考察されている。中田の疊字に関する論旨は、本人によつて以下のようにまとめられている。<sup>1)</sup>

(一) 平仮名および片仮名における一字の疊字は、漢字の疊字に起源してゐて、古今同一で変遷が無かつた。

(二) 漢字の疊用に万々歳々および万歳々々の両様式があるが、平仮名および片仮名もこの両手法を襲つて、「い、よ、」「イ、

ヨ、」「いよ、」「イヨ、」の疊用音符を用ゐた。  
(三) 片仮名の「イヨ、」は平安朝以降用いられなくして滅んだ。

(四) 片仮名の「イ、ヨ、」は平安中期より漸次「ノ、」の形に変化し始めた。これはまだ上下不均整のものである。平仮名の「い、よ、」は連綿体のために「ノ、」の姿となつた。この形が平仮名に現はれたために、片仮名の両点が誘はれて短線に漸次伸長したらしい。

(五) 平仮名の「いよ、」は「ノ、」に進み、上下均整の姿を示すに至る。しかしこれが平仮名の「ノ、」如き不均整なる姿に働きかけて、漸次これを変形せしめ、また片仮名の「ノ、」を誘つて均整なる形に導いた。

(六) 片仮名の「イ、ヨ、」を「イヨノ、」に誘導したのは平仮名の連綿体の疊字の力であり、この「ノ、」をさらに均整のある「ノ」にまで誘導したのも、また平仮名の連綿体の力であつた。

(七) すなはち、平仮名の連綿体の疊字が主動的であつて、片仮名の疊字は平仮名の模倣に過ぎないことがわかる。さればこそ追隨的な片仮名の疊字と平仮名の疊字とが、ついに今日の如く同形となつたのである。平仮名および片仮名が、ともに同一の「ノ」を用ゐるといふ現象は、決して偶然の結果ではない。

(八) 片仮名の「イヨ、」式の疊字が、鎌倉期に入るまでに滅んだといふ理由は、平仮名の疊字が、主動的であつた事実によつ

て解釈され得る。平仮名では、平安後期に降れば、「ノ、」の如き二点の疊字が連綿体の影響により「ノ」の形にまで進化を遂げたのであつた。すなはち結果として、「ノ、」の二点の疊字は、平仮名においては廃滅されることになつたのである。されば平仮名を模倣追隨してゐた片仮名も、早晚平仮名に用ゐられなくなつた「ノ、」を放棄するに至つたのである。

中田によると、二字以上の反復が起こる場合には、「ノ」が用いられる前は、「ノ、ノ、ノ、」が用いられてゐたとされている。「ノ、ノ、ノ、」については、「その始めは両点に記されたのであるが、平仮名の連綿体の筆致に引かれて、やや伸びた姿を取つたもの」として、漢字を起源とする「ノ」が連綿体の手法に影響を受けて短線に伸び、徐々に伸長変形していったとされる。この変形が片仮名で用いられる疊字にも影響を与え、点から線へと変化していったと考えられている。この手法によつてできた疊字は、上部と下部が不均整である。

現在用いられているような均整のとられた疊字の発生は、もう一つの手法である「ノ、ノ、」に求められると考えられている。この形のものも、先のものと同じく連綿体に影響を受け、次のようなものがみられている。<sup>2)</sup>

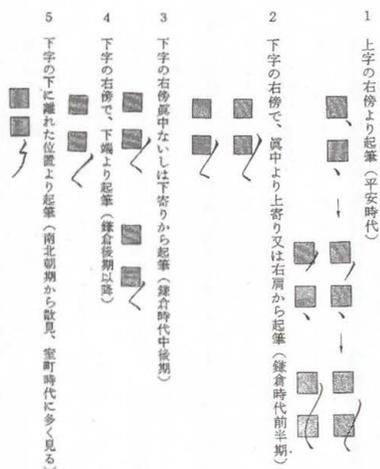
本阿彌切 ○かへすノ、○ひよノ、○かすノ、

御物期詠集 ○ほノ、

盤珠院本古集 ○かへるノ、

小林の論考は片仮名を扱つたものであるため、平仮名と同じもの

として扱うことはできないものの、疊字の線化の経緯をおさえるうえで、次に引用する。<sup>3</sup>



片仮名における疊字の線化は、平仮名の影響を受けたものであるといわれている。そのため、平仮名における疊字の線化は、少なくとも片仮名よりも同時期以前に変化が起こっていると推測できる。

### 三 黒谷上人語燈録における疊字

本行と振り仮名は同時代の筆である。しかし、振り仮名は存覚のものであると推測されており、別筆であるとされている。そのため、それぞれを分けて検討・考察を行う。

各疊字の用例を調査した結果、同じ仮名が連続する場合は、ほと

んどの場合において疊字が用いられていることが確認された。一方で、疊字が用いられていない場合も確認された。このような疊字の用いられ方について、中田は以下のように述べている。<sup>5</sup>

かうした疊字を用ゐる手法は同一資料であつても全般に現れるのではなく、ある箇所では疊字を用ゐないでそのまま書き下すといふのが通例である。

このことから、同じ仮名の繰り返し返しがみられるからといって、そのすべてが疊字で書き表されることはないといえる。しかし、その疊字が用いられないものの中には、何らかの理由で疊字を用いることができなかったと考えられるものがある。そのため、本稿では、同じ仮名の繰り返し返しがみられるからといって、そのすべてが疊字で表現されるとは限らないことを前提とする。この前提に立ち、「黒谷上人語燈録」において、疊字が用いられなかった部分についての考察を行っていく。

#### 1 本行における疊字について

『黒谷上人語燈録』における各疊字の用例数は、管見では以下の数を挙げることができた。

・ ……九八八例（うち漢字に用いられているものはみられなかった）  
〈 ……三九六例（うち漢字に用いられていたものは六二例）

↘ …… 八二例



は、同じ仮名が三文字続けて用いられているものの、いずれも「、」は語中に用いられている。語頭に疊字が用いられない用例が集中した原因として、単語で区切る意識が影響している可能性も指摘できるだろう。

疊字が用いられない用例の割合は、仮名が繰り返されている場合全体の中の約9%であった。この割合から見ても、原則としては疊字が用いられていたとすることができるだろう。

### 1. 2 本行中の「 $\sphericalangle$ 」について

本行中の「 $\sphericalangle$ 」の用例は、三九六例挙げられた。また、用例の疊字の形状について、起筆位置が前の文字の上部、中部、下部にあるか、また、それぞれ斜辺の上部、下部のどちらが長いか、等しいかという観点で分類を行った。起筆位置は上・中・下部にかかわらずすべて右側であった(表3)。

『黒谷上人語燈録』が二二二二年の時点で印刷、出版されたことされるため、「 $\sphericalangle$ 」は起筆の部分から考えて、「□、□、□」のものが連綿体の影響を受けたものから成り立っていると考えられる。そのため、起筆部分の斜辺の方が終筆部分の斜辺よりも長く、不均整なものになっている。これは均整化がみられた「□□、□、□」のものに同化されたとされている。しかし、『黒谷上人語燈録』においては「□□、□、□」から派生した疊字はみられなかった。起筆部分を見てみると、起筆が上の文字の中部、下部からとなっており、中田や小林が例に挙げていたものの年代とほぼ同じ傾向を示しているといえる。

表3

下部		中部		上部	
下長	上等	下長	上等	下長	上等
〇例	二三四例	〇例	一〇三例	〇例	一三例
	二三例		三例		〇例

計三九六例

斜辺の下長は一例も見られず、上長が最も多い結果となった。これらの起筆部、疊字の形は小林が示した変遷に合致するものである。また、管見では、二文字以上の繰り返しが起こっている場合で疊字が用いられていない例は、「ましまし」「おのおの」の二例のみであった(左参照)。

ましまし 卷六8ウ5

流式こりりす三歳はしましま曇曇か乃

おのおの 卷二58オ7

今時に證しつゝまとの折つるさればれの

水々水々なるふやふやとて詮行しや

南無阿弥陀佛

また、漢字に対して「〱〱」が用いられている用例が六二例みられた。用例の内訳は、「中（二二）」「返（二四）」「人（二三）」「事（二二）」「南無阿弥陀佛（二一）」の四種類の文字に用いられていた。「〱〱」のものについては、これを用いることで、「二音節以上で読むことを示している」ということが指摘されている。用例に挙げられた文字は、すべて二音節以上で読むことのできるものである。また、「返」「中」は「〱〱」での用例のみがみられ、「人」においてもこの用いられ方が最も用例数が多い。これらのことから、「〱〱」が用いられる文字は決まっている、もしくは傾向があることが推測できるだろう。

また、「南無阿弥陀佛〱〱」としても用いられており、これは二文字以上の漢字で唯一「〱〱」が用いられている用例である。「南無阿弥陀佛」が繰り返されているのは二例のみで、「〱〱」が用いられているものとそうでないものが一例ずつ確認できた。疊字ものは、文章中に出てくるものであり、用いられていないものは、章末での文末で用いられているものであった。ここで疊字が用いられるのは、スペースを省略するためであると考えられる。

卷二3ウ1 南無阿弥陀佛〱〱

ゆゑにがらゝれりて南無阿弥陀佛〱〱

卷二15ウ7 南無阿弥陀佛南無阿弥陀佛

1. 3 本行中の「〱〱」について  
本行中で「〱〱」が用いられている用例、用いられていない用例の数は次のとおりである。

「〱」が用いられている用例……八二例

「〱〱」が用いられていない用例……二〇例

「〱」が用いられている用例は、「念」（一〇）「様」（九）「種」（七）「漸」（日）（四）、「品」「時」「別」（三）、「我」（二）、「歩」「少」「夜」「刻」「比丘」「一」「面」「所」「世」「生」「億」「悪趣」「遅」「縷」「宗」「各」「少」「怠」「人」「口」「番」（二）だった。さまざまな文字に対して用いられており、また、最も用例が多いことからやはり原則として文字の重複がみられた場合は「〱」が用いられているといえる。

「〱」が用いられていない用例は、「念」（二三）「一」（二）「漸」「人」「處」「世」「種」（一）だった。「種」のみ行をまたいでおり、そのためか疊字が用いられていなかった。漢字に対して疊字が用いられていたのは、書く手間を省くことが要因といえるだろう。

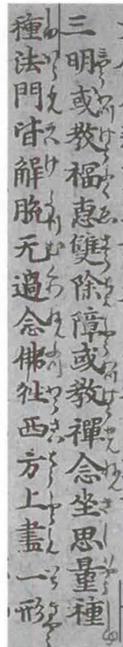
卷二29才6 卷六42ウ1

日〱夜〱時〱刻〱に

様〱に

卷五52才6

念〱念〱



2 振り仮名における量字について

『黒谷上人語燈録』の振り仮名の用例数は以下のとおりである。

、……五五七例

〈…一九九例

「」は用いられていない。

2. 1 振り仮名中における「、」

振り仮名における「、」の用例五五七例のうち、四七七例が「こ、ろ」であった。それ以外の用例には「ち、(父)」「す、(数珠)」といった用例のほかに、漢文での訓点で用いられているものがみられた(表4)。

表4

語頭		語中		語尾	
濁	清	濁	清	濁	清
	一六例	四八一例	二例	三九例	一三例
	七例				

計五五七例

仮名の繰り返しがみられるが量字を用いていない用例は、一八九例見られ、状況ごとの用例数は次のとおりである(表5)。

表5

語頭		語中		語尾	
濁	清	濁	清	濁	清
	二七例	一三四例	一三例	一一例	〇例
	四例				

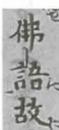
計一八九例

量字が用いられている場合と、そうでない場合の用例を合わせると七四六例になる。その中で量字が用いられていない割合は、約二五%にのぼり、本行に比べて割合として多くなっている。このように量字が用いられないケースが増える原因の一つに、文字の間隔が挙げられる。テキストを見てわかるように、振り仮名は本行の文字に比べて小さく記されている。その際「起行」や「弘願」といったものは、「き」と「きやう」、「く」と「くわん」の間隔が空き過ぎているため、量字が用いられない例が多く見られたといえるだろう。

卷六 26才2

卷一 42才5

卷四 11才3



さらに特筆すべきは、量字を用いていない用例一八九例中、

一〇六例が「し」であったことである。これらの例の中には、文字の間隔が空き過ぎていることに起因する例も見られる。一方で、次に挙げるような例は間隔が空き過ぎていないということがあてはまらない。

卷一 46ウ6

卷二 23ウ1

至誠しじやうしん

大師釋だいししやく

量字が用いられる要因の一つには、簡略化が想定される。しかし、特に字母が「之」である場合は、この簡略化のメリットはほぼないといえるだろう。「至誠心」の例では、二文字目の「し」が一文字目から連なって書かれていることからこれは考えられるだろう。

また、「至誠心（四九例）」「決定（一一例）」「語燈録卷第一（二〇例）」「弘願（一一例）」など、ある特定の表現の際には、量字を用いない場合があることも考えられる可能性もある。

## 2. 2 振り仮名中における「 $\sim$ 」

振り仮名中の「 $\sim$ 」の用例は二〇〇例挙げられた。本行で行った分類をここでも行い、次の結果が得られた（表6）。

表6

上部	上等	三例
下長	〇例	〇例

下部	中部
上等	上等
下長	下長
〇例	一〇六例
一二例	一一例
六八例	〇例

計二〇〇例

本行同様、振り仮名においても、下長の用例はみられなかった。どちらも今用いられているような「 $\sim$ 」ではなく、起筆が文字の右側にある。このことから、中田のいうように「□、□、□」のような形のものから変化したものと考えることができる。連綿体の影響を受けて点から線に変化したことは中田が明らかにしている。しかし、「も（毛）」や「ん（无）」「し（之）」などと「と（止）」「の（乃）」ではそれぞれ異なる。「も（毛）」や「ん（无）」などは、終筆で上がった後に量字が用いられている。そのため量字の上部が長くなる傾向がみられる。「と（止）」では終筆の位置が右側にくることから、必然的に字の右下から量字が続くため、上部と下部の長さほぼ均等になる例が多く見られた。また、「の（乃）」「ろ（呂）」では終筆が左側へ払っていくため続けて書くことができず、二字目の右側から量字が用いられている。二字目の上部から起筆がみられるものは、「も（毛）」や「ん（无）」といったものの後に用いられるか、「あなかしこ」など三文字以上の後に用いられる場合に多く見られた。

量字が用いられない用例は、四二例挙げられた。そのうち、例外

② 前燈の

① 生彼國とてけの三心といはし誠心ニよ深  
 心三へ廻向發願心けり三心けくくふわ

として扱うことができると考えられるものとして、①行をまたいでいるものが五例、②音は重複しているものの、単語として見たときに区切れているものが一七例、③三度重複がみられ、三度目に疊字が用いられているものが二例、④文字の間隔が広いものが一例の計二五例が挙げられた。それ以外の一五例は、例外として考えた。

また、この場合にも行をまたぐ場合は疊字が用いられることはなかった。③、④についても、先で述べたとおりである。仮名が重複しているすべての場合において、疊字が用いられるわけではないことは、先行研究から明らかにされている。「<」においても、「、」と似た性質をもつことが②から推測できると考える。疊字は繰り返すしによる音の省略や、狭いスペースに書くことができるといった特性を持つ。一方で、二音節以上のまとまった音が繰り返される際には、語をまたぐ問題が生じる。振り仮名においても本行と同様に、振り仮名を振ることで先の特性よりも、語の切れ目を明確にするということが優先されるのではないだろうか。

卷一 14才5 しんしん

③ 至戒心深心具足

④ 沙弥

四 結び

今回の調査の結果、『黒谷上人語燈録』において、以下のことが知られた。

- 1 同字が続く場合、本行では九二・四％、振り仮名では七六・六％が疊字で用いられている。
- 2 疊字が用いられない場合においては、語の切れ目が意識されている。
- 3 行をまたぐ場合は、疊字は用いられない。
- 4 語によって、用いられる疊字の種類傾向がみられるものもある。
- 5 振り仮名において、「し」が続く場合は、疊字はあまり用いられない。

『黒谷上人語燈録』において、仮名の繰り返しがみられる場合には、原則として疊字が用いられていたものの、例外もみられた。なかでも、疊字が用いられない場合は、二文字目の仮名が語頭にあた

る用例が多くみられた。このように仮名が繰り返されていても、疊字ではなく仮名を用いることで、語の切れ目を意識していることが推測できる。

行をまたぐ場合には、どの疊字も用いられることはなかった。これは、疊字があくまで文字の連続を意識して用いられるものであり、行をまたぐことよってその意識が切れる、もしくは文頭には疊字は用いることをきらう考えがあったと推測できるだろう。

また、本行の「々」や「〱」で見られたように、ある特定の漢字に対して決まった疊字が用いられていた。これは奥<sup>8</sup>によつて、「々」は音読みに、「〱」は訓読みに対してあてられるということがいわれていた。

最後に、振り仮名においては、「し」が重ねて用いられる場合は疊字が用いられる例は少なかった。これは「し」の字母が「之」である場合には、疊字が用いられる要因の一つである「簡略化」にあまり利点が見られないことや、字間が空いているため疊字が用いられなかった、という要因が複合した結果見られたものであると考えられる。

(広島大学大学院教育学研究科博士課程前期)

## 注

- 1 中田祝夫『改訂版 古點本の國語學的研究 総論篇』昭和五四年 六二四頁
- 2 同 六二三頁
- 3 小林芳規「踊り字の沿革續紹」『広島大学文学部紀要二七号』

昭和四二年 二五頁

4 浅井成海責任編集『龍谷大学善本叢書 一五 黒谷上人語燈録』平成八年 七四八頁

5 中田祝夫『改訂版 古點本の國語學的研究 総論篇』昭和五四年 六〇七頁

6 二〇〇七年「國語文化学特論Ⅲ」発表資料 奥「黒谷上人語燈録における踊り字の使い分けについて」によつて指摘されている。

7 括弧内の漢数字は用例数を示す。

8 6に同じ

本稿は二〇一一年前期「國語文化学特講Ⅰ」及び後期「國語文化学基礎演習Ⅰ」の発表を元に執筆したものである。